在英雜務書類

十類 大使
二冊
架
五函

国立公文書館
分類
排架番号 2A 33-5 ㊖ 261

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

正院記録

各理事官
并随行之面々 江
第々被仰付候事務之綱領一通差遣候条篤与可相
一々熟覧尤其附之廉々区分取捨可被遂審議候也
明治五年壬申七月十九日　特命全権大副使
右之通相達候ニ付いつれも一ゝ熟考可有之候也
岩倉具視
副使各位諸君

内閣記録局

本日書通之寫復之一通ハ大藏司法工部之外随行
倫敦在留之向ヘ一通ハ宮内陸軍文部米地在留之
向ヘ差遣ス

別 岩倉
別 木戸
別 大久保
別 伊藤
山口

大原令之助

三等書記官被 免随行之儀被仰付外政事
務取調之爲使節附属被 米國滞在被仰付候事

明治五年壬申七月廿九日　特命全権大副使

本日當人ヘ辞令書相渡 會計掛ヘ差遣ス

別紙新嶋七五三太之義今般事情有之書面之通り於
亜國勤弁仕居候一体書記官ヨリ随行之儀依頼之
義有之候得共右者一体御趣意ニ付御伺申上候
右者己ニ限リ之書記官心得之名義を以申出候
共即今之存候間一應御取扱相成候様仕度候
候ニ付旅費等生活ヨリ御渡之儀文部理事官
附属通弁御用ニ而被仰付候ハヽ右之義ハ御用中
一ヶ年金銀之義者御渡之相成候事ニ而然ル右
之義者家郷ヘ御渡之筋ヲ以内情ニ御座候

太政官

右唯今迄之通被下候ニ而御職務相成候處英人ニ付御雇之儀
御免ノ上右様ニ候ハヽ英文之通被下置且御雇之名義ニ
而右之御雇被下候ニ付都而理事官随行之向ヘ
之同様ニ相当ル之間此上差存候條御達案相添伺
候也

七月十九日　　　　書記官

御達案

新島七五三太

右之者事書記官心得被召出候而當分御雇之儀被仰付候事
理事官附属通弁御用可相勤候事

但御手当之義者御雇中一日墨銀六弗充差遣候
御渡被下候事

伺之通相済候付右御達書付田中文部大丞ヨリ
相渡ス

本文

大久保

伊藤

米國于在留學生

新島七五三太

右之者事務官心得ヲ以テ文部省理事官随行被命

候ニ付先般當館ヨリ理事官随行之義名義

情實之ハ雇入之振ヲ以一旦解雇ノ上川路其外ニ書

新島之儀ハ同人ニ事務官心得被免候

文部理事官随行被命候ニ付其段被命候

ハ同國ニ留學中既ニ用ニ此ノ以テ給致事

候也

但下文御達案ヲ以御伺候

御達案

新島七五三太

右之者當分在留被免候事

同　人

右文部省理事官随行申付候事

但御手當之儀ハ是迄之通一ヶ月墨銀百八十枚

並御雇中ニ付不足之分ハ別段下ケ渡可有之候

本文新島御雇之義ハ申立之趣も有之一時之

是迄之當分修行申付置候處此度理事官随行之

儀ニ付更ニ職任申付候ニ付テハ當分之手當等之儀

諸事同列之給料ヲ以テ別段下ケ渡以テ一家族ノ

爲ニ可仕候

大久保文部少輔ヨリ理事官随行之儀相伺候處

修業中理事官随行申付職任手當之儀

可然ト存候事

一公務局ハ朝十字ヨリ夕四字マテ之ヲ開キ書
記官一同相詰罷在ヘク候事
但日曜日ハ休日ノ事
一交際事務ハ勿論外人ノ引接其他接待饗宴等
ノ節儀禮及ヒ諸省理事官ヨリノ伺達等凡百
公務ニ關渉スルヿ都テ公務局ヲ経テ可施行
候事
一四副使ハ従前ノ如ク諸省事務分課擔當致ス
ヘキニヨリ各事務各其所任副使ヨリ印可ヲ

経テ施行シ別ニ各位ニ咨稟ヲ不待候事

但其分任スル所ヲ再ヒ左ニ掲ク

海陸軍文部宮内　木戸

大蔵海陸軍　大久保

工部教部　伊藤

外務司法　山口

尤交際事務ニ至リテハ伊藤山口首トシテ其任ニ當リ候事

一一等書記官ハ開局時間ハ必ス局ニアリテ諸事務ヲ取扱ヒ使節ヨリノ下命許案論繳一同協議斟酌シテ使節ノ允可ヲ取リ施行スヘシ其協議ノ證トシテ諸文案必ス四人ノ鈐名ヲ要シ候事

但交際事務ハ一同之ヲ任スト雖モ従前ノ如ク公文日記ハ田邉福地通辨翻譯ハ塩田何各課ヲ分テ之ニ任スヘキ事

一二等以下書記官従前分課スル所ノ外小松ハ大使林ハ木戸副使杉浦ハ大久保副使大原ハ伊藤副使安藤ハ山口副使ニ分属シ其属スル所ニ従テ其事務ヲ取扱フヘシ仍テ従前分課ヲ左ニ掲ク

諸雜務及ヒ官物取扱ヒ小松通辯翻譯及ヒ

横文謄寫林杉浦大原安藤尤安藤ハ兼テ旅
中荷物取扱ヒヲ可心得事

一　一等書記官私事ヲ以テ寓館ヲ出ルヿアル件ハ出入必ス伊藤山口両副使ニ告クヘキ事

一　二等以下書記官同断其出入ヲ分屬スル所ノ使節ニ告ヘキ事

但公務局ニモ其由ヲ断ルヘキ事

合衆國ハ政俗簡易軼蕩ヲ尚フヲ以テ公務ヲ初メ私ノ交接モ都テ禮數ヲ主トセス故ニ使節一行ノ習ヒ亦略之ニ類似ス今歐洲ニ至リ頗禮節ヲ宗トシ廢事整粛ナルヲ要スルニヨリ猶一層ノ鞭策ヲ加ヘ公務局事務粛穆整齊ナル様可心懸候事

岩倉具視

木戸孝允

西洋八月十八日　大久保利通

伊藤博文

山口尚芳

某文類出版之儀ニ付各県へ達之通

各省理事官

并随行両人へ

書籍出版之儀ハ於米国御帰朝迄各自ニ於テ務而綱領ヲ分

累ヲ御報ニ及候而随行纂集之為各位ヨリ御差図相成候

之積ニ有之候然ル處來月ヨリ新聞紙ニ記載セラレ候存候

就テハ追テ御報知可有之候得共自然以書面御達可相成候当

地ヨリ御発行之儀ハ御帰朝之上御報知ヲ以御沙汰

之事ニ御座候也

明治五壬申年七月廿一

特命全権大副使

七月廿六日返簡 海之内地ト英ト条約之通ニ処理ス

寺島

岩倉

木戸

大久保

後藤

山口

法律師一人当省ニ於テ雇入之義至急取運之儀

御取計有之度此段申入候也

壬申七月十九日

佐々木司法大輔

使節

御中

下ヶ札案

兼テ御依頼人撰之義者使節方ニテ評議可及

候条可被成御承知候也

一 金四百両余　別紙之通リ

一 四艘内及四艘代　去ル八月ヨリ十二月迄

一 雑費　佛英亜三国巡歴并手料及給銀船賃料

一 通詞人ノ四艘代

右者先之内渡是迄ニ相成候分相除キ官用金之分ハ追払之上精算相成候様致度候也

壬申七月十九日　佐々木司法大輔

下ケ札

兼テ届出候金額之内一ヶ月之分先取計候事

山口

太政官

佐賀縣旅費之儀御達之趣承服候事

山口

大久保

伊藤

別紙

米國ニ而渡方之分

一 米金千弗

右内弐百四十三弗九十四セント　事務官ヘ米國ニ而渡し出拂

殘り七百五十六弗六セント

一 英金三百六パウント十六シリンク　英人ロングフ氏雇入ニ付百十八日分給料出拂

右米金ニ而凡千五百弗

内七百五十六弗六セント　右殘金ニ而渡り

殘り七百四十四弗

一 二百五十一パウンド　佛國ニ而旅中商用ニ付欽事務
買入代且又旅費金

通計四百ポウント

太政官

高辻修長

右英國ニ滞留宮内省出仕中用品考調之者相渡候様致度此段
頼入候也

壬申六月二日

東久世通禧 ㊦

岩倉全権大使

閣下

右者毛原ノ高辻ヘ渡ス即チ東久世副使ヨリ取計候ノ
漏ニ付其人ニ達ス

一等書記田邊太一

醫員スローンドヘ

去ル戌一月中香港ニ於テ拙者使節之命ヲ以テ足下
雇入之儀申約束致候処右期限相満候ニ付最早以来
却之事ニ付猶又雇入候義ハ一統之者治療之為メ
盡力有之候段ハ於使節深ク感謝致候依而
右使節之命ヲ以テ申進候謹言

千八百六十二年第八月廿日

七月廿一日達

岩倉

木戸

大久保

伊藤

山口

龍動府寓館ヨリ発ス　千八百七十二年第八月五日

以手紙致啓上候然ハ医学生徒使節御随行之期限ニ満ル

後ハ御知之下当地状態ヲ伺候且又医生勤仕中醫

業書ヲ読居候為使節ヨリ出候之モノ厚ク御沙汰ヲ被下候処

使節御離去之始終遅ニ相成候事ニ付　希望致居ル

当地文之形勢之至リ候ニ付今之内ニ於テ勤仕中ニ有之

一　給料銀行之仕送ヲ当分ノ内ハ継続候様

其之向後御用之節ハ以後ハ随時添意致シ候

願ニ御座候ニ付郡令之儀ニ於テハ医生ニ付テ之大年

之ニ付各之ヲ議セン

アル、エス、スローン拝具

海外留学之儀ニ付英語通学卒業之上文部省ニ於テ検査
之ヲ経留学免状ヲ受ケ発程ノ儀ニ付御協議之処近来
之儀ニ有之候官費ヲ以テ諸国ヘ出候者多ク有之候得共
中ニハ一丁洋字モ不知行言一語モ不通者モ有之
来航之後一ケ年乃至今ニ至リ英語通学之業ヲ卒ル
費許多ニシテ其功甚少ナク其上当人ノ為ニモ無益ニ御座候
英語通学之儀ヲ中国ニ於テ十分出来候上ニテ尚卯
為中国内ニ留学以テ其成業ニ至ル然シテ後海外ヘ留学
廿六字ヨリ学問始メ留学致シ候テ五六年之久ヲ経ル

候も一学科をも不極ありて随て当国へ来航之
学生を進歩不致人相増候而其費ハ莫大ニ相成候
之故自然当国之名誉を汚し候様ニ相成可申存候
加之右様人撰一途ニ出不申候而ハ来学之者各自立
之風ハ無之新来之同人進退ニ紛擾を生し且
其進退之際ニも退て不学之境に至り候者多く
相成候間帰国之懶惰之者ハ無之様致度候
相成ニ付其来学之者ハ今日之形勢に応し候様
一途ニ出て新来学生之者ハ卒業之上ニ近く自然
進退之際ニも難渋相成候故向後留学生人撰之上

御座候而普通学卒業之者又は右有之候ハゝ撰挙之上
専門学科を命し学資を給し候而可申
候義ハ御採用相成候様被存候右海外留学規則確定之上ハ
不至事ニ候へ共即今右規則之儀ニ付一時海
外留学生之相成之義取計不可然存候

壬申七月廿二日

大副使

辨務使

御中

第一条

一此度佛國在留中日國政府ヨリ撰挙セル参謀士
官並ニ砲兵造築會計懲罰士官四人ヲ命シ諸
學問ヲ爲教シ佛國政府ヨリ契約致シ右士官等ニ
慇懃ニ謝禮セント欲シテ大使佛國ニ於テ是迄ニ右應シ
物品ヲ何某ニ与ヘル之級ヲ書記シ且然ル日國陸軍局
ニ於テ右士官等之出張ニ於テ右等事務ハ

但帯ル所ハ劍刀類ヲ然シ之ヲ存在

第二条

一 證ニ付テハ若其者ハ陸軍省書生トシテ遣ハサレ候ニ付 私
出立之節陸軍省ヨリ之證書ヲ所持シ佛國
着之上随行之儀相違無之可申候

第三条

一 右證書所持之者ハ陸軍省書生ニテスイツツル
國之學校ニ而勤學致シ候事當年ヨリ卒業ノ後
國之所役ニ付テハ右ニ付通辯人ニ而同國ニ於テ相勤
之學卒業之者ハ右ニ付歐洲遊歴中ニ可致
事ニ付無滞可相渡様可取計候事

第四条

一 佛國ニ於テ綱内右學生滞留中佛國ニ於テ費用相掛候節ハ本國政
府ニ而請取可申事

第五条

一 當年中諸雑費金ハ右學生相渡大日本人ニ而費
用ノ儀ハ出張駐在者等ヨリ申出候様取計候事
但右人ニテ他ニ振合可相成様取計候事

第六条

一 私義ニ而當時大日本ノ人ニテ佛國ヨリ出張在勤
ニテスイツル。ベルジユム。ヲランダ國ヘ出張ニ付諸費ハ此後
可取計候事

但岩下治右衛門之内壱人ハ當國ニ而用向相済次第

佛國ゟ差返可申候事

第七条

一スイツル國新発明之野戦砲并佛國之タライヤース

兵學要用之緒器械等買入方ニ付先概算ヲ以英金

一千パウンド相借候ニ付追而精算之上差出候

右条々之趣御指揮之程奉願候

七月廿七日

山田理事官

大副使

御中

一別紙大山従之郎義殿下ニ随遊歴中同行致候ニ付

御沙汰之上ハ右兵頼置候ニ付西洋暦七月ニ日ゟ

砲兵事務取調ニ付差出候即日ゟ日本暦同年中

之御手当料之通御願候間御頼仕候

渡方之儀西暦四月廿日ゟ壱年分御手当料日本暦同年中

御渡方之儀御沙汰之程奉願候

西暦九月日

山田兵部理事官

大副使

御中

山田理事官ゟ之伺書並ニ英國

一 佛國其外ニ而御雇之儀ニ付何レモ同國政府ゟ其筋ヘ被
申越候ニ付右来リ其器物之儀精密ニ取調其外
室等之姓名官名ヲ以テ洋字ニテ御書出ニ可相成

一 滋之ニ付太田清之助其外人民ゟ金子並ニ諸機械買入之
代金等相備候ニ付一時出之ニ付右御届之程書出之
大蔵理事官ゟ之ニ付傳承候ニ付返ヘ御出シ之陸軍省定
額金之内ヲ以テ返納可致様之事

但買入之分機械等代金其外来之分ハ御拠相成

右之通御尋可申上候事

太政官

一 帝國政府ト仕番所ト協議之儀ハ難相成旨戒
島山〔?〕務仕ト通達致候条同人ヨリ可致談候事

一 自然右様之通達有之候事

但大田仕三郎ト御沙汰之趣モ鮫島ト可申含置事

萬一彼仕番事務ニ綱一ト通ヲ出來候ハヽ至急御報
ニ及ヒ候且兼テ港中滞在中外事通之紀行編輯之為
当課ニ於テ綱之分諸ヲ心得之件ヲ書類差出シ可申上之
含旨通ヲ御沙汰之趣異儀無之候ニ付右事務
未タ其目途ニ無之ニ付引続滞在之傍仕番政事
同之取調其事等退キ其際ニ於テ一ヶ條之見聞紀行
之義モ別段可申候件之義モ差出候筆紀ニ仕度趣
段申上候以上

申七月廿三日

内海〔?〕一

野村靖

特命全権大副使

閣下

申立候趣兼而承知致居候得共御報知被仰遣候得者使
節御出之折ニ是非共御報知之儀ニ相願
候ニ付此段為念申達置候也

別紙之通内申理事官ゟ申立之趣無余儀次第ニ付可
有之候此段為心得御達候也

七月廿八日　　　　書記官

尤も右出張ニ付其筋ゟ差図之方可然出張之趣ニ付申
奉存候

官費留学生

大野直輔

大蔵理事官随行一等書記官義之上今海関税并港

規則等ニ網羅年中功勲可為致事

但御用中出勤ニ不及事

七月廿八日出仕可有之候即日英文之方ニ而寺島大輔

務使下ヲ以今般其局ヨリ当分可致之旨拝謁被仰付候

岩倉

木戸

大久保

伊藤

山口

官費留学生

大野直輔

右者数年当国ニ留学罷在経法等粗相心得居

候趣ニ付拙者随行要緊義之口海関税并港内

諸規則等当年中取調御報告相成候様被仰付度尤拝

命之上ハ出勤料一日一弗宛被下候様致度依而奉伺候也

壬申七月廿八日　理事官　田中光顕

大副使

閣下

岩倉
木戸
大久保
伊藤
山口

官費留学生　会津
樋口富蔵

右者三ケ年来当府鉱山ニ於テ出張鋳鉄所ニ
入込実地研究諸局一ト通リハ鉱業ニ於テ熟練致シ候
当英国ニテモ紡織機械ノ類ニ於テ頗ル宇内
ニ有名ノ場所ニ候ヘハ右当人事ニ熟スル者理事官
随行之儀ヲ以テ相願候理事官ニ一派鉄器遣
十分ニ為致候間何卒国益之為メ少々滞在被仰
付候様ニ御配慮被下度此段奉願候也

第八月廿五日　　在國近 [illegible] 押

大副使 各閣下

然ハ大使書記出帆後ニ付遅延之者随行ト仕候間

差支無之哉 去七月廿八日本省出大蔵務仕候以書翰問

合ノ書面之通差支無之旨挨拶有之

理事官随行之儀ハ差支無之候 付 大蔵 良蔵 同様

付而総ニ案 指文

岩倉　大久保

木戸　伊藤

山口

出達案

官費留学生

野口富蔵

工部理事官之英國ニ於ケル紹織造取調之中

ニ事

但滞留中学費之儘被下候事

特命全権大副使

官費留学生

粕林之助

右之者当国於テ数年之間鉱山学修行致在
粗卒業ニモ及候ニ付 此般 新諸所之鉱山巡廻之節
同行致実地之事為致候ハ一層之便利ニ可有之
候ニ付幸存候ニ付同行為致候得ハ御報之通ニ私一同
御報告当国鉱山所揃方実験ニモ試験考致候見
込之趣ヲ被依之委細本報ニ譲ル也

八月廿日

大島高任

前書之通大島高任ヘ之ヲ写相達之通被仰付候様
此段奉希候也

肥田為良 押

正副使

御中

御達案

官費留学生

粕林〻助

工部理事官随行大島高任申合鉱山実地之綱
同人帰朝之砌一同帰朝可致事

但御用中手当下賜候事

右之者鉱山稼務仕候ニ付御用濟之上御帰朝可被成度 差支
無之旨御挨拶有御座候事

岩倉

木戸

大久保

伊藤

山口

商務ニ關シテ六月六日當府發途仏国巴里孛国
孛林瑞西七子ワトニ経歴七月二日帰着致シ候ニ付其
左之通旅費出張之分御渡被下度候也

八月一日　　　　中山信彬

特命全権使節御中

諸勘巴里之往来　　英金六ポント
巴里より孛林之往来　　仏金五百三十八フランク
巴里より七子ーワ之往来　　四百五十四フランク五十サンチーム

太政官

以上九

事務ニ關シテハ何篇も熟考いたし被
致候義ニ付積リ取扱難成旨御請申上候事

中八月二日

右之通大久保副使ヨリ考へ候而副使ヨリ申出候ニ付
此段申達候事

以書状啓上致候然者各国理事官等之随行之
面々当地滞在中之間事務ニ関シテハ各
各ニ於テ其本紹介候積ニ而事務取調出来候
儀モ有之候ニ付理事官等随行ニ向ケ候様候
積之義ニ付辨務使館ヨリ一ケ所ニテ差出シ候様
紹介状を以テ各国ニ於テ依頼之義申付候ニ付
以テ右ニ依頼候様申進候也

中八月二日　大副使

寺島大辨務使殿

岩倉

木戸

大久保

後藤

山口

私儀不束之身過分之御役被仰付候ニ付而者不及乍力候

心得ニ而精々勉強仕候得共私儀ニ者至而鉱山術熱心ニ罷在

候得共未タ深ク探索網ニ到兼候、実学修業仕度候段兼而申上

置候通洞察不足ニ而鉱山之儀ニ付天下之為ニ輝

四五年留学仕度奉存候ニ付而何卒右鉱山之為

実地研究仕度辞職之儀御許容被成下度奉懇願候也

八月 日

豆野 樋二郎

肥田造船頭殿

前書之通申出候ニ付願之通被仰付候様仕度此段相伺候也

也

秋田遠江殿 花押

正副使

此件

秋田理事官別之通辯官其外唐人江頼候ニ付
御差遣被成下候ニ付此人へ申入通ニ相頼候事

伊藤副使 花押

先般三菱所持濱山ニ網之義ニ付委細秋別ニ
通辯官と唐人江相頼候て其経費ニ付委
人共之通ニ候間一ヶ所抔ニ相成候趣相兼候
右ニ付相頼之内通辯ニ兼而ニ合双方ニ
網之上候間事相付別段通辯官唐人ニ之義
等相成候間其鉱山ニ網中相熟九八九十日之間
植之郎相当之通ニ仕付ニ相付候相頼候也

西暦九月十二日

秋田遠那爲良 花押

正副使

英國都合三人スコツトランド・アイランド・ウエールス・イング
ランド・四ケ國之鉱山相廻リ其之仕法何精細ニ調可
申度存候ニ付英國政府ニ而議事局ニ而場所ヘ申立候處
同議ニ者右申立相應之事ニ付右鉱山ヘ差遣シ候
ニ鉱山之趣ニ付右ニ入用相成候道具取揃三名廻歴旅
中之費用等代償元英金百ポンドニ相成候間何卒右伝
内鉱山廻歴ニ相用候元手用ニ相掛リ候得ハ右御下金
宜敷御取計之儀精算之上奉存候也

明治四年八月廿日

大島高任

長野桂二郎
粕林之助
前書之通ト存候ニ付預リ之通ニ作候様被成
預リ候也
和田逸船頭 花押
以上案
預リ之通リ[illegible]候田中ニ而[illegible]一ッ[illegible]来
大久保
例[illegible]

鑛山見聞私議

合衆國ノ部

本邦ハ鑛山諸處ニアリ内大ヲ稱シテ算フ者凡ソ五曰加利福尼、曰子ワダ州曰ユタ州曰ニユヨルク州曰ペンシンウェニヤ州是ナリ

加利福尼ノ地ニ黄金ノアルヿヲ始テ唱ヒ出セシ者ハチェスウイウト宗ノ僧ニシテ廻カ多年前ノ事ナリシカ其後千八百三十三年ニ至テ佛人「バリック」ナル者始テ黄金ヲ堀出シタリ千八百四十年ニ至テ米ノ岡士「ラルキン」ナル

者ヒンテレイ府ニ在テ「サンフェルナント」(今ノサンフランシスコナルベシ)邊ノ人民其所ノ土中ヲ淘汰シテ人毎ニ一日四五元程ノ沙金ヲ拾ヒ得タル「ヲ聞キ之ヲ當時ノ國務尚書ニ報知セリ

千八百四十八年ニ至リ「マルシャル」ト云者此邊ニテ黄金一片ヲ拾ヒ得テ大ニ喜ヒ遂ニ奮勵シ會社ヲ結ヒ其邊ノ地ヲ堀リ盛ニ金ヲ捜リテ大ナル利ヲ得シカハ其事ハヤ新聞紙ニ載リ四方ニ流傳シ利ヲ視テ走ル人心見キヽモ知ラヌ加利福尼ニ何方トモ無ク人集リテ忽チ萬ヲ以テ算フルニ至ル

千八百四十八年ヨリ千八百六十年マテ十三个年間ノ黄金出産ノ表ヲ見ルニ毎年四千萬両ヨリ六千万両ヲ出ス合テ六億五千万両ヲ出セリ

黄金

黄金ハ天然ニシテ石中ニ生シ或ハ砂中ニ生スル者多シ其砂中ニ生スルモノヲ砂金ト稱ス砂金ハ沙土ニ錯テ一丘ヲ成シ一山ミナ金壌ナルモノアリ谿谷河底ニアルモアリ

加利福尼ハ砂金多シ但シ金礦モ之レカラス「アマドル」ト名クル山ハ最良ノ金礦ナリ凡リ沙金ヲ取ルノ法ハ種々アレ圧水銀ヲ用ユルノ法最モ良トス是レ互ニ能ク親和スルヲ以テナリ砂金ヲ含メル壊土山ヲ成シタル時ハ高地ヨリ狭キ溝或ハ樋ヲ以テ水ノ引キテ其山ニ灌キカケテ沙壊ヲ注流セシメ之ヲ細長キ樋ノ如キ箱ニ導キ其底ニ水銀ヲ蓄ヘテ流レ落ル金壊ヲ其中ニ注入セシム此箱ノ底ナル水銀、水ト共ニ流レ去ラサラシムニハ底ニ仕切ヲナシ間ニ石ヲ挟ム等ノ法アリ是ニ於テ壊中ノ金水銀ト混和シ一箇ノ含密親和物ヲ成ス之ヲ「アマルガム」ト唱フ即チ金ト水銀トノ親和物ナリ之ヲ又皮ニテ漉シ水銀ヲ分チ取リ之ヲ再ヒ前法ノ樋中ニ用ユ然レ圧アトニ未タ軽量ノ水銀金中ニ残ルヲ以テ「リトルト」ト云蒸炉ニ入レ烈火ヲ以テ水銀ヲ蒸餾シ離レ去ラシムレハ全ク純金ヲ得ルナリ

石中ニ生ル者ヲ採ルニハ其法甚タ多シトイ

ヘトモ大約ニ之ヲ云ヘハ金石ヲ細密ニ碎キテ前法ノ如ク水銀ヲ用ルアリ又漸々ニ其碎粉ヲ淘汰シテ土石ノ分ヲ去リ而シテ金粒ヲ得ル法アリ

銀

銀ハ合衆國ニテハ「子ワダ」州ニ尤モ多シ都テ十九山アルノ内「コローンポーイント」ノ銀山ヲ殊ニ富メル者トス當時此鑛山ニ用ユル鑛夫二百餘人ニ及フ其賃銀一日ニ付一人三四元ヲ拂フトナン但シ役人ハ此外ニアリ

右銀山ヲ目算シテ凡ソ價ヲ定メ以テ手形一万二千枚ヲ作リ之ヲ衆ニ賣ル衆之ヲ買テ又互ニ賣買ス是レ山ヨリ出銀ノ高常ニ多少アリテ平均ナラザル故其變化アル毎ニ手形ノ價モ亦上下ス當時右一枚ノ價香港ノ相場ニテ六百元ヨリ六百二十元ニ及ヘリ故ニ此一山ノ價洋銀七百二十萬元ニ當ルナリ而シテ現ニ山ヨリ出ル銀ハ毎月四十五萬元ヲ産ス壙ノ深サ直径一千一百「フヒート」ナリ壙ヲ開キ始テヨリ以来今ニ十年ナリト云

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

ユタ州モ亦銀山多シ然シ壙ノ開キ始メシハ僅六年前ノ事ナレトモ近頃次第ニ新壙ヲ開キ益盛ニ至ル許多ノ銀山中「エンマ」山ヲ最モ大ナル者トス近来之ヲ英ノ鑛山社中エ價五百万両ニテ賣却セリト云鑛石ヨリ銀ヲ取ルノ法多般アリ或ハ濕道法ヲ以テ之ヲ採ルアリ或ハ乾道法ヲ用ヒテ之ヲ得ルアリ甲ハ塩酸即チ格羅林等ノ法ニ依テシ乙ハ礦石ヲ捽キ以テ漸々ニ熔解シテ得ル等是ナリ金ノ如ク水銀ニテ採ルノ法モ亦アリ

銅

銅ハ米國ニテシュツペルヨル湖ニ尤モ多シ爰ニハ自然銅ノ侭出ルモノ少カラス（日本ニテ硫化銅等ヲ自然銅ト唱ルハ誤リナリ）自然銅ハ其性質硫化銅硫鉄銅灰白銅酸化銅等ニ比スレハ殊ニ美ナリト雖モ過タルハ及サルノ理アリテ粘力強クシテ鑿リ採ルニ難シ是ヲ以テ却テ右四種ニ劣ルコトアリト云

銅石ヲ熔解スルノ法種々アリ然レトモ其大略ヲ云ヘハ先ツ銅石ヲ捽キテ土石等ノ雑物ヲ

去リ銅分多キモノヲ集メ之ヲ爐ニテ焙リ硫黄石炭等ヲ去リタルヲ又反射爐ニ入テ熔解シ之ヲ採ルナリ純銅ヲ得ルマテニハ數度斯ノ如キ手數ヲ経ルナリ火度ノ加減ニ色々術アリ

鉄

鉄ハ米國ニテシユッペリヨル湖チヤンプレイン湖ペンシルウエニヤ州等ノ諸州ニ出ツ我カ實撿セシハ右ペンシルウエニヤ州デシウエル府ノ鉄山ナリ此山ハ甚タ小ナレトモ尚日毎ニ五十頓餘ノ鉄石ヲ出ス即我一萬貫目ニ当ル可シ

壙中ヨリ人馬鉄石ヲ上下スルニ蒸氣器械ヲ用ヒ其力僅ニ三十馬力ト云而シテ其器械ト釜トノ價合テ三四千元ノ間ニアリト云

鉄石ニ多種アリ其性品ニ従テ其名ヲ異ニス内ブローンヘマタイトト名ルハ最上ノ物ニシテ其色焦茶ノ如シ「レッド、ヘマタイト」ト唱ル者ハ頳色ナリ「スペキユラー」酸化鉄ハ鋼鉄ノ光リヲ帯フ磁石酸化鉄ハ多ク砂鉄トナリテ

出ツ其色鉄黒色ヲ帯フ等是ナリ
銕ヲ鎔スニハ通例高爐ヲ用フ此内ニ鉄石石炭灰石ノ三品ヲ逓次ニ装填シ而ル後下ヨリ火ヲ點スレハ火氣爐中ノ諸部ニ亘リ爐内ニ在ル物ヲ一齊ニ之ヲ焼ク爐ノ下部ニ口アリテ之ニ栓ヲ施セリ熔解ノ度至ルニ及テ之ヲ取リ放セハ即チ熱鉄ノ流レ出ルヲ又砂ノ鑄形ニ導キ之ヲ自然ニ冷ヤセハ條鉄ト成ル之ヲ諸般ノ製作鍜工等ニ用フルナリ
此ノ如ク高爐ノ上部ヨリ鉄石等三品ヲ入レ下部ヨリハ熔鉄ヲ流出セシムルヿ器械修復ノ時ヲ除クノ外年分晝夜連綿トシテ絶ルヿナシ「フヒロドルフヒヤ」府ヨリ六十里ナル「ベスリエム」ト云処ニテ實検セシ製鉄所ハ一日ニ二百五十頓餘即チ我五万貫目宛熔成スト云

鑛山成功ノ大趣意

凡ソ鑛山ノ成功ハ山ニ縦横ノ壙道ヲ鑿チ連ニ壙奥ノ鑛石ヲ採リ得ルニ在リ然レトモ我邦ハ近来マテ蒸氣火藥岩錐ノ器械等ヲ鑛山ニ施スノ術ヲ知ラサレハ之ニ代ルニ小寸ノ鑿

ヲ以テスルカ故ニ堅石ニ當テハ終日カヲ尽シ
シ僅カニ二三寸ニ過キサル事多シ是余カ曽テ
實撿セシ所ナリ然レモ洋人ノ所為ハコレト
異リ過日米國ニテ肥田氏トホーサツク、トンチ
ルト唱ル蒸氣車ヲ通スル為メニ設タル直径
五里ノ大山ヲ堀リ通ス鑿開ノ仕掛ヲ見ルニ
實ニ驚ヘキ者ナリ坑ノ高サ三間半ニシテ幅
四間ナリ之ヲ堀ルニ一日ニ平均六七尺宛モ
進歩スルト云其仕掛タルヤ東西ノ両端ヨリ
堀リ又尚ホ成功ヲ速ニセンカ為メ両端ノ中

央即山頂ヨリ百丈（一千フヒート）ノ縱壙ヲ堀リ下シ
テ又左右ニ堀リ早ク両端ニ續カセント思フ
者ナリ

右百丈ノ上ヨリ汽器ヲ以テ壙底ニ空氣ヲ送
レハ器械ヲ運轉シテ錐ヲ回ラシ径二寸深サ
七八尺乃至一丈ノ穴ヲ鑿チ之ニ火藥ヲ填メ
電線ニテ火ヲ點シ破裂セシメハ一回ニ莫大
ノ岩石ヲ鑿開シ大人數ノ功ヲ奏スルナリ
扨右ニ云上ヨリ送リ下ス空氣ハ次第ニ壓迫
シ風炮ノ理ノ如ク大ニ張カヲ起シテ器械ヲ

動スヿ蒸気ノ力ニ異ル無シ
蒸気器械ヲ直ニ壙中ニ用ヒサル所以ハ火薬ニテ破烈セル石ノ之ヲ破ルヲ恐ル、ト壙底ニ器械ヲ仕掛ケ備ル等ノ不便トニ依テナリト云

近來ダイモント、ディリイル即金剛錐ト名クル者アリ加利福尼州ニ於テ尤モ多ク之ヲ用ユ是レハ石ヲ鑿ツノ名器ナリ金剛石ハ世ニ知ル如ク諸金石ノ堅剛ヲ比較スルノ表ニ於テ十ノ位ニアリ最上位ニテ之ニ勝ル者無シ是ヲ以テ玉石ヲ切ルニ切レサル者ナシ依テ是レヲ以テ錐ヲ作リ其形チ径三寸許ノ圓ニ中ヲ空クシ周圍ニ黒金剛石ヲ挟ミタル者ナリ之ヲ以テ鑿タント欲スル石ニ當テ器械ノ力ニテ疾ク廻セハ觸ル、所ロ悉ク切レテ一ノ深キ穴ヲナス之ニ火薬ヲ填メテ電線ノ導火ニテ破裂セシメハ廣大ナル岩石瞬間ニ裂レテ数百人ノ労ヲ省キ其功ヲ収ム故ニ鑛山堀通シ等ニテ壙ヲ鑿開スルニ十年ニシテ成ルモノハ三年ナラスシテ成ルナリ

右両種ノ器械ハ鑛山ヲ開キ堀通(トンネル)シヲ鑿ツニ
實ニ肝要ノ利器ナリ我邦ニテモ鑛山鉄道等
ニ用ヒハ人力ヲ省キ成功ヲ速ニスル幾倍ナ
ルベシ

右件々記載スルノ外鑛物ニ關係ナルモノ即チ
亜鉛(トタン)。鋼。石炭。種々ノ石類。石灰。製塩。石盤。等ミナ實
撿取調ヘ置タレハ追々之ヲ申上候

八月朔日

長野桂次郎花押

右之[illegible]

[illegible]此段及御達候事

申八月十五日　　使節事務局

會計御中

大久保

伊藤

私事昨十五日當府發程ガラスコー如來ル理事之

爲差越候旅費之分御見込ヲ以一ト先四拾ポンド丈ケ御渡

下ケ被成候様御府之精算勘定ヲ仕候ヲ仕舞宜

敷御取計希候以上

九月十四日

野口富藏

瓜生震

松田理事官殿

前書之通リ申出候ニ付宜敷

松田二等理事官

此十五日當府出立スコットランドヘ罷越往返凡十四五日掛りに
して再度當地ニ罷帰海軍アルセナル等巡見之上
直ニ佛國并和蘭國等ニ罷越候積りニ付無據御座
候也

九月十四日

柴田日向守

正副使

旅中

ヽ岩倉

ヽ水戸

ヽ大久保

ヽ伊賀

大久保

伊藤

山口

千八百七十二年第八月三十一日桑方濟新聞

アラスカといへる蒸氣船日本より入港せり茶貳萬千三百

八十五包生糸三百七拾五包海産數箱ニ日本人二名を載

せたり

横濱の新聞ニ云く東京之據置會を東京者の新聞ニ

再び之を開く由しと

鐵道を日本西中より見捐之人民輻湊し各ニ至ニまで

議ニ至ニ至

外國人注集切手ニ佐法採用ニ相成三百余ニ往令会を

出來事とするこの外國人等ハ日本政府ニて條約を
改定し其國内を開くことなく內地にて商業をなす事
わざる者その他見物者ニ旅人とするも手續にて許
状しなくハ入貿者ニ之を妨得せん
傳信ハ長崎にて凡六百里をも出来より新聞着く
ところ長崎ニ直て傳信於通させる事ある知るべし
江戸にて十一人ニ家族を殺しける犯巡（ポリース）役ハ召捕ニ
於ける仕事を修せし事
第二週目以前ハ生糸の商賣盛んなりしも凡そ金子百包
ニ以て當る此年の総額ハ千二百包位なりき　茶九千担

ことゝ直て賣れたり
日本朝鮮の議論ハ和しく於支那にてハ戦争となる
も朝鮮ニ應援すべきことを布告せり支那より之を新聞
にてハペイホの川口ニ砲臺を築きて砲を備へ日本と戦争の
時ハ防禦ニ用意をなせりと
カンボシア王ハ北京ニ赴く途中にて香港ニ到着せり
これハ支那ニ日照させる為め多く人数ニ出張なる口實
を引連れたり
外國人ハ日本を嫌へるニ情思しく主として今南部ニ
諸藩と此等ニ為れハ小艘ニ軍艦を使用ひ於ける

還幸之上ニテ朝鮮一条之儀ハ瞭然たるへき次第あるへし
横濱のヘラルドといへる新聞紙ニ方今於日本人
の非常之方向を轉し大ニ手を進め来るを記載せる
時節なるを記し事件差起る時ハ有用ニ方向を採
る事あるへきを其國民之幸福ハ大ニ予ニ告てある事
なりといへり
日本行之英國船當九月一日ニ出帆せり五百六十八萬弗
余ドルを積載せり

以書付奉願候

新井某

亜米利加國出帆英國ニ到着仕候以来土地物情ニ熟し殊ニ
其後ニ米ニ越候而旅行之於病ニ就て精ニ療養
罷在候処去ル勤驗之為メ先般温泉ニ罷越候て然
る處醫師より聞候ニ付何等之義ニ候
御使節方藩搭葉ニ廻歴中者附添之ため差下
置候様奉願候四年學地方へ参候而湯治仕度
之事情附之而拾別之嫌疑之以て願候

通り御許容被下候様致度此段奉存候依之新[illegible]

願之上如此ニ

明治五年申八月廿日

福地源一郎 花押

小松[illegible] 盟 花押

大使

副使 閣下

岩倉 当時中之[illegible]田之塩田安房引受ニ付右三年在一而[illegible]

木戸

大久保

伊藤

山口 使節之者務筆ニ世四條府ニ付[illegible] 時解書在ニ付[illegible]

私共儀當分取調爲済次第出立仕歐州各國左之通
巡廻之上報告候得ハ歸國仕度存候右ニ付旅費並歸
國旅費之分先節共來之月迄之分御見積之上御下
渡被下度此段奉伺候也

一 當地出立之巡廻左之

秘露　比耳時　普魯士
魯西亜　墺地利　以太利
瑞西　佛蘭西　西班牙
葡萄牙

岩見鑑造
由利公正

私儀當處ニ而御用未濟候ニ付去秋出立仏欧州各國
巡廻致今般伊國ヘ罷越候ニ付旅費甚外失却候ニ付見
積之上御下渡之方ニ而無之様御取計有之度候
但之御先之之旅行御用向ニ而綱之為メ致今ヨリ留学
生之内通辯之者雇之上ニ而差遣候者猶亦大抵也ん
積出下渡有之度
九月
石見鑑造
由利公正
前書之通願出候ニ付司法省理事官以先例施行出等

露ヘ差回シノ節旅費金下付伺

書記官

別紙之通

此度各国巡廻之場所ヘ被差遣候ニ付旅費之儀ハ可

相渡候處右場所旅費之儀ハ先般之通リ可相渡

候哉委細ハ田中ヨリ精細ニ可申上候也

然ル処右ハ米国ニ於テ中諸雑費掛下ケ高英金

百五十八封度八シリンク一ヘンス 封度 相渡方願出大使両副使

御検印済之上田中ヘ精細ニ可相達ナリ

追而 内訳書ハ田中氏ヘ渡シ置候事ニ有之候

大使

副使

大久保

伊藤 別紙各国巡廻之場所ヘ差遣之通御渡旅費金下付
之上右御申立ニ可有之事 博文

山口

私儀当地御農事務取調之儀大略出来仕候ニ付而ハ
尤守固並精一儀ハ暫時滞留為致出用等手伝増為致度
而ル上フランス、ゼルマン、ロシア、オーストリヤ、イタリー、
オランダ等之各国ヘ出張仕度依之此段奉伺候

阿部潛

沖守固

手島精一

又

私儀各国ニ罷越御農事務取調ニ付テハ於其

各地当営生ニ居候人之儀事務有之旨申出候ニ付差支無之
通ニ而当分当地ニ滞留事務取調度候也

八月

阿部潜

沖守固

手島精一

別紙阿部潜外弐名ゟ願出候通御許容有之候様致度
此段私よりも奉願候也

申八月

大蔵理事官田中光顕

大久保副使殿

伊藤副使殿

願之趣承届候尤も手島精一義ハ阿部潜沖
守固両人当地取調相済候上ハ帰朝之心得可被
致候事

但米国ニ而御達之旅費ハ不相渡候事

大久保

伊藤

各省理事官随行通辯方之義命下候書記官之義ハ

應理事官ト進退ヲ共ニ致候者ニテ以来使節一行

之事務ニ関係不仕候故之ヲ書記官ト名義不

適当ニ付此段ハ之ヲ改メ理事官随行ヲ命シ候方

可然且其手当向等ハ其者之等級ニ應シ下賜候様

此事至当之御處分有之度存候　右也御承諾之存候

六月

木戸孝允

伊藤博文

大副使

岩下

岩倉

大久保

山口

西岡中議官

高崎少議官

於露國スタチスチツク會議親見學之爲右之者所要之儀ト存候ニ付奉職事務不調候間以右事件之調可致候也

月日

特命全權大使

右ノ通存候間及御協議候也

岩倉具視

副使各位諸君

木戸

大久保

伊藤

山口

今朝之内罷出可申之事

口演手控　東復当別

私儀先般欧米各国随行之命ヲ蒙リ仏国ニテ
留学仕候処近来少々病気有之候ニ付今般自費
ヲ以当地ニ滞在経学勉励致通弁出来候ハヽ各国経
歴仕度宿志ニ付何卒当務辞職仕度此段当件乍恐
此件容易ナラス候ヘ共大副使ヘ御伝言被仰付切ニ奉懇願候　以上
敬白

洋十月廿三日　村田経満

東久世理事官

書記官

此度伯パルリン并ロンドン府ゟ着之上ハ従来諸府
邑ニ而応酬いたし候親睦饗宴之日追新年莫大輯
業事ゟ従来為筋ケ全く賑附之御用ニ付其間凡
三千日分御廻歴中之下置候御補料之儘下賜候様
仕度此段奉窺候

一 岩倉

一 木戸

一 大久保

芳下

御布告

出口

[illegible]

太政官

壬申十月十五日発小弁務使[illegible]報之[illegible]

各国在留弁務使館諸入用給料等別帋之都合

取調候処大抵之通ニ御座候

一 大弁務使　壱ヶ月　二千圓

一 中弁務使　壱ヶ月　一千七百元

一 少弁務使　壱ヶ月　一千四百元

右之給料を以 飲食薪水洗濯奴僕并招客饗

応在留中馬車料等之一切支弁候事

公使館ハ 公財借賃之外別段[illegible]一歳之

費[illegible]事

公使館ノ用ニ為シ又ハ雇入候者ヘ外務省ヨリ
支給スル月給ノ儀ハ雇入ノ節ヨリ其期限中給料ノ外
別ニ支給セサル事
其他公用ニ付旅行及臨時之費ハ別ニ支給スヘキ事
公使館ノ用筆紙等ノ類一切及書状仕立様ノ
費ハ都テ別ニ支給スヘキ事

一 二等書記　五等官　一ヶ月　四百五拾弗
一 三等書記　七等官　一ヶ月　二百八拾弗
一 四等書記　八等官　一ヶ月　一百五十円
右ハ為在留賃借料都テ一歳二百円支給候事

一 書記試補　等外　一ヶ月　百五拾弗
右ハ公使館ニ住居セシメ別ニ家屋料ヲ不支給事
右給料ヲ以テ飲食之類水火僕婢之費ニ充ツヘシ尤公用ニ
付東京府内出行馬車代及旅行入用ハ別ニ支給スヘキ
事
右之外務省較差職務使役ノ通リ可然存候事
中八月
但職務使以下書記生等ハ在勤中右之通リ給料
並下宿等ハ自分ニテ本國ヨリ官給別ニ支給不致
候事

岩倉
木戸
大久保
伊藤
山口

一 弁務使並随行在勤ハ満期三年たるべし尤別段ノ事故あるときも此限ニ非す

一 書記並試補人員ハ各国事務ノ繁簡ニ従ふて差あるべし

一 弁務官員給料ハ欧米各国ノ例ニ於ても其使ニ給するあるべし俸給其所在ノ地ニ依り差ありと雖とも其事実務を詳ニするニ依り其適宜なる処を知へからす故ニ軽重なく表ニ従ふべし

辨務官員給料表

壱ヶ月 英佛米獨魯五國

大辨務使 貳千円

中辨務使 壱千七百円

少辨務使 壱千五百圓

右之給料を以飲食薪炭僕婢給金招客饗応費

府内馬車代ニ當つ右之使館借家人并之公用之為

旅行其他臨時之公用 臨時外國人雇入并之類 事情探索并之筆紙墨文 但之家財付

房一切書状傳信機代を以弁償たるへし

壱ヶ月 英佛米獨魯五國

一等書記	壱ヶ月	五等	四百五拾圓	家屋料 壱ヶ年	三百円
二等書記	〃	七等	二百八拾円	〃	三百圓
三等書記	〃	八等	二百貳拾圓	〃	貳百圓
一等試補	〃	九等	貳百圓	〃	貳百圓
二等試補	〃	十等	百八拾圓	〃	貳百圓

右之給料を以飲食薪炭水火僕婢給金等之費ニ當つ

右外公用之但府内馬車代及ひ旅行之費ハ公費ニ属する

同しく

一 一等書記一時か辨務使之代任たる時間壱ヶ年 三千圓

増し割なるへし右出勤中公用馬車代を自辨す

除し

一 二等書記一時一等書記ニ代任する時ハ別ニ給料を増さすと雖ども辨務使ニ代任する者ハ一等書記同様壱ヶ年三千弗余之割増を給すへし

一 旅費支度料及別段賜金之儀ハ追て相達すへし

右帰朝旅費支度料も同断之事

一 外国書記雇入料ハ公費たるへし

一 辨務使代理ヲ勤ル書記より以下医療薬代ハ官費たるへし

壱ヶ年	英国	佛国	米国
独乙 ベルリン	八千五百封度	拾四万フラン	壱万七千五百弗
瑞西 ベルン	弐千八百封度	八万フラン	七千五百弗
白耳義 ブロッセルス	四千封度	八万フラン	七千五百弗
都児其 コンスタンチノプル	八千封度	拾四万フラン	七千五百弗
伊太利 ロドム	五千六百封度	十一万フラン	壱万弐千弗
英吉利 ロンドル		廿七万五千フラン	壱万七千五百弗
佛蘭西 パリス	壱万封度		壱万七千五百弗
是班牙 マドリッド	五千六百封度	十五万フラン	壱万弐千弗
魯西亜 ペートルスボルグ	九千封度	二十万フラン	壱万弐千弗

澳地利 ウヱアナ 九千弐百封度 廿万フラン 壱萬弐千弗

丁抹 コーブンヘイゲン 四千封度 五万フラン 七千五百弗

葡萄牙 リスボン 四千四百封度 五萬五千フラン 七千五百弗

合衆國 ウワシントン 六千封度 九万フラン

日本 トウケイ 四千封度 七万五千フラン 壱萬弗

右英佛米三國ハ各全權ヲ送ル公使ニ給スル俸金表

在米國日本辨務館入費見積

一 家賃料 洋銀 壱ヶ年 三千弗

一 使丁壱人 同 同 八百弗

一 賄役壱人 同 同 八百弗

一 館内掃洗壱人 同 同 四百弗

一 馬車屋 同 同 千五百弗

一 公使館附馬車御者 同 五百弗

一 招客饗應 同 同 三千弗

一 炭薪水氷ガラススタンプ試筆紙諸雜費 弐千弗

一 公用旅行　　手扣

今ニ至ル二ヶ年ニ付他除時雇入給料官員旅料食料
ニ至ル迄別ニアリ官員食料ナル人前若干ニテ幾許ト斗哉
積リニシテ定メテ年九百圓若干程算報僕ニ至ル迄積尤
館用品要ニ定カナル物ト書籍等買入料ニ至ル迄ニ右都下
無益ノ役所ヤ事
前揚ケ墨算ニテ其國物價ノ高下ニ依リ物ノ流レニテ多
少異アル譯之未ダ私ニ報シ他府ニ其レヨリ價アル事非常
無ノ事トク知ル者僅シ其積ヲ以テ精細ニ経済セサルニ

概ニ適宜スヘシ　秘密ナル他各國ト異リテ恒常
際ニ據リ彼ノ需要ニヨリテ物價彼ノ節倹ニ
據ラサル筆紙事アレハ其報費從ツテ許多各國ニ一
般ノ例ヲ以テ計算之ニヨリテ多寡ヲ一覧シテ分
明ナリ
右ニ付テ職務繁劇ニ候ヘハ無益ノ事務ニ於テ出費積ナシ
之ヲ無益ニシテ甚タ彼方ヨリ今以其通詞ニ差遣シ
節頭地ニ於テ当實地ニ付経験一体ノ模様ヲ分リ
一ケ所ニテ當務ニ勘定シテ会決シテ一定ノ費額ヲ難
立ルハ根本ナキノミ都合次第ニ也

森　有禮

大弁務使寺島宗則殿

各理事官

并随行之面々へ

兼而被仰付候事務取調方者当年中頭
済発程何レモ帰朝之積ニ可被致候
但発程之日限并ニ出張旅費ハ可申談候事
明治五年壬申十月十一日　特命全権大弁務使
右之通一応相達候間可然御申付候
一岩倉
一木戸

大久保
伊藤
山口

大蔵理事官田中光顕
門脇重綾儀先頃書記官被免私随行被命詞讀
之務兼掌罷在候処今般久米邦武義之務兼
掌仕候ニ付而ハ同職事務ヲ被為免候ニ付而ハ寛
業候も勤向之義ハ差別無之候間同様当月朔日より
御渡下候様仕度此段奉願候
杉山一成富田命保義も同様之義ニ付是迄御渡下之金ハ
一日一歩宛ニ而御座候ヲ当月朔日より御渡之節ハ同様
同職事務之通御渡下候様差添奉願候以上

壬申十月

特命全権大副使

御中

右之通リ申出候付可然御取計候

此段

御答

大蔵省七等出仕理事官随行

阿部潜

我政府ニテ当十月ヨリ之ヲ当初借付居候紙幣不

残バンクニテ買取リ紙幣ハ國家ニテ返上ニ付来年十一月迄三ケ月

分償還之儀相願候紙幣等相成候様致度候

壬申十月

前文之通申出候右ハ至当之情実ニ付此段相達候算方可然

御取計可有之候也

田中大蔵理事官

願之通御聞届相成可然哉

大久保

伴蒿

手島精一

沖守固

私儀御用ニ而仏国巴里斯ニ于今滞在候ニ付

壬申十月

御手当之義旅費之義今般御達之趣ニ付

阿部潜

私儀勧農事務取調之儀大略出来仕候ニ付一二週間之中仏国マルセイル港ヨリ乗船帰朝仕度奉願

右願出候以上

壬申十月

[illegible]義元

大野直輔

當國海関税事務取調罷在候處海ニ相成来ル十月

其后蘭府發途巴里斯府ニ於て彼国税法書類取調經

由サウサンプトン マルセール ブリンヂシー之三港ハ右船

舶税之商船解纜之場處ニ而輸入品積出之地ニ付

右港之各所之一週間宛税関在税関之事務貨物

之代價貿易之景況於実地取調来春正月中帰朝

ニ相成候様此段奉願候以上

壬申十月

田中戸籍頭殿

田中光顕

別紙之通願出候ニ付右之通取計此ニ可申候處税関海関

ニ付接費ニ付一ヶ月此段奉伺候以上

壬申十月

大久保副使殿 花押

伊藤副使殿 花押

右之通申出候ニ付可否奉伺候

口演手扣

私儀先般欧米各国巡行之命を奉し佛国ニ滞
留仕候処已ニ近々御帰朝相成候ニ付テハ爾後自費ヲ
以当地ニ滞在語学勉励致通辯出来候上各国語應
仕度志願ニ付何卒当務辞職仕度候間右件
宜御取計大副使公之御許可被下候様奉願候

洋十月廿二日

村田 経満

東久世理事官

閣下

獨乙ニ赴キ本朝ニ適當ノ政治法律
其ノ通シテ政治ニ於テハ勿論右ニテハ教師用様ノ節
諸文ノ研究ニ西洋ト此ノ上ニ於テハ鞅掌勉務候事ト存
此段ニ於テ差遣候様ニ御取計ニ相成度候事

私儀此秋仏巴里府滞留既ニ満一年満期ニ付帰朝當
初ノ志ト相違シ僅ニ一年ノ所修甚浅ク見當未タ慥ナラス
是ニ依テ猶二箇年滞在研究仕度候ハヽ帰国之場合切ニ奉
ニ候得ハ又ハ何卒格別ノ御詮議ヲ以テ二ケ年滞在之作御許可相願
候也

明治五年壬申七月

法国滞居

文部中教授 入江文郎

木戸参議殿

私儀此年為修業科學問之為欧州ニ差遣

遣シ度右之条件ヲ以テ御約定其節大学南
校教官ヨリ同人ヘ南校ニテ協議之上相渡シ候無
余教員文部洋学ニ於テ事ニ而不足ニ依テ洋生一年前
ニ至リ事ニ而右物候猶又当時之御改革ニ而無程輪船
ニ相成先達而今般廣山右物候依テ右紙之通延取之候ハヽ
御許容願候
但右四年中文部大丞ヨリ申出之趣モ有之候ニ付此段
并願候也
明治五年壬申七月
文部中教授 入江文郎
木戸参議殿

右之通申立候ニ付文部省ヘ問合之上ニ而可然旨申出候
之ヲ為許候
木戸

岩倉具経

私儀是迄米国ニ於テ留学仕居候処学校規則合宜キ
業ニ就テ私見込モ有之候ニ付英国ニ滞在修行仕
度右此段願之趣奉願候

壬申十月

特命全権大副使

閣下

右願之通此段御許容被成下候様此事伺候

岩倉

別紙大使ゟ之御伺之趣尤之事ニ付其通少弁務官
右於往返旅費下賜り之程詮議之事存候依之取計度
少弁務官差添 無拠事實候

第九月廿七日

少弁務官
伺之趣無余儀候條往返旅費下賜候事

岩倉
木戸

木戸
大久保
伊藤
山口

大久保
伊藤
山口

一金三千両
右者宮内省ニ於テ先般買物代金不足ニ付当分繰替致度相
伺候処宮内省定額金ヨリ大蔵省ヘ可致返
済之処当分御渡相成度候事
癸十月十三日
宮内理事官

前書之趣兼而大蔵理事官ヘ及協議候処
差支無之ニ付御渡相成度候

一英貨三百磅

宮内省用費として
此分ハ三分ノ一ヲ返
日本ニ於テ買上物代ニ充テ度
其旨宮内省ヨリ大蔵
省ヘ可申出事

一金三千両

右之通御渡し之儀夫々御取計可被成候也

辛未十月十二日

會計掛御中

書記官

一金三千両

右者宮内省ニ於テ買上物代金不足ニ付御渡相成候
右ハ平素御取扱之儀宮内省定額金之内大蔵省ヘ一
返納之筈其御省ニテ御取計可有之事

十月十二日

全権大副使

御中

宮内理事官

一各国ニ於テ御用之品相済候ハヽ当年中帰国ニ付御返

覚

一 池田二等書記官並ニ通辯随行之儀申付候事

一 於各國交際並御用費トシテ貳千圓御渡相成
候事

九月九日

宮内理事官

全権大副使

御中

諸省ヨリ派出之理事官並随行官員ハ悉ク今年
中帰朝之筈ニ有之今般御發遣ノ儀モ御達有之候處抑某
紙幣仕立方独乙國ニ米國新約克在留吉山租税権頭ヨリ同様
御達ノ上紙幣ノ存候ニ付當分同人儀ハ當分新約克ニ於テ御製
造之紙書紙幣摺立方監督方取扱候ニ付右紙幣
製造御用相済候迄ハ洋米之儀御猶予相成度此段御掛合
上御許允有之度存候也

壬申十月廿二日

吉田大蔵少輔

特命全権大副使

若山租税権助ニおゐて御委任之儀兼而承知いたし候ニ付即
ち同人儀を大蔵理事官代として米国滞在租務取
調ノ為差立候事ハ年来御免し専ら御施政之功績
證書并ニ紙幣独立監督方御依頼被成候ニ付而も　御差遣
相成候而者右自前ニ而も差遣候事故其節同人ゟ当
向差遣し置候ニ付御滞在中御取計可被成候様御掛合
旁此段御依頼候也

壬申十月廿二日　　特命全権大副使

吉田大蔵少輔殿

御中

英國総領事府チョイント ナショナール エーゼンシー 新聞
為可掲出ヲ差留メ候処 新聞紙第〇同月より再顕出候
令子月令 離通ニ付 夫々別ニ用心致シ候所報ニ
仕候得共 猶中 如何ニ 差出 猶 離隔ニ付候
新聞紙ニ 佛蘭西和蘭ニテ 次ニ廣告約定仕候
法律ヲ以テ 今更 實行ニ付 猶 新聞紙 強以テ
商業ヲ極メ候何年ニ為 英 且 商年中 欧羅
巳ニ 為 費用 為 第二条ニ 為 相借ニ 候
下 候 為 出来 可 致 候 以 出 第二國

之裁判ヲ請候ニ付細目算出仕難ク候得共概算仕候右者和
借之分其之納之義者出行相成候節旅費等許
調書ニ依テ以後之儀ハ御裁許之積ニ候也

司法権中判事　平賀義質

壬申十月

全権大使殿

全権副使殿

覚

第一条　一金　百ポンド

右御裁判ニ付英国之法律師ト謝礼金并世話人
ト掛合之入用並往返船路出費等之為メ凡予算積
候分

第二条　一金　八拾ポンド

右之者両年中欧羅巴滞留入用之為メ凡定額之外ニ為相掛候
予算積候分

合金　百八十ポンド也

別紙之通リ予算　権中判事ヨリ積出候ニ付　右第一条和借
金之儀者来ル十二月中ニ於テ倫敦ニ而御渡之通リ可相成

申立候ニ付御調之上此程謁見願候ニ付未大輔
陸地ニ理事ニ之在之人登呈候私共者ニ之不足之大概之述
金高五千一ポウントニ相成候処右今又此度被之内情
申立候ニ付此ニ及申述候御ト年存候私共又申
之條ニ御ニ於テ候旨被仕置度ニ之在之人来懇難渋候仕
族ニ此貸金ノ御用立相成候ニ而ハ無之候右
御借用相成候様ニ而ハ無之ニ此願ニ付候ハ一先御断ハ
今般相成候事ニ相成一応御年存候

大副使殿下

書記室

手続ヲ以テ当府下佛國ニ而被相致候事ノ應接候節ハ何
之之二ノ段ニ差上候ニ付之度繕ヲ以テ此度以テ別段之
殿之中山之後新陸地巡歴致シ度御旅費此節渡方相成
之候何分之之度之此節渡方之之相成候大副も此程
候且ハ国法理事并遊行之為ニ之之先白依之来矢
輔ニ談シ巡歴旅費又之付之之通リ御渡之相成居
御巡披候

此差図之之通

月日某此落合之ハ難之度此段候事

書記官

第二条 相償金ハ単ニ当時役官際ニ於テ相当ニ……

原案 田中少輔ヨリ請取候

加ヘ会社開店ニ於テ難堀ヨリ相覲早速返納可

然ニ付相償金取出ニ付テハ其金員ニ應シ発候

此等原本其相償書共取ヨリ請取ヨリ文候事

大久保

伊藤

山口

相償金領書

一 英金拾磅　掛償領高

右者曾テヨイントナシヨナル会社ヨリ英金百三千磅内 八分金 弐千磅

九磅十二シル 一般金譲ノ方ニ於テ外国社被繊ニ於テ八目下

弐千磅九シル 一

圓迎ニ於テ名ル相償ニ文ヲ合テ相償ニ係リ付受取候

書取ル原ニ也

壬申十月廿四日

大蔵省七等出仕

阿部潜

代 沖守固 花押

大久保副使殿 花押

伊藤副使殿 右報

以下紙葉

預ケ金高相償候ハヽ右四千之戸籍ヨリ可下ケ候

[illegible]

ジョイントナシヨナル會社破綻之難ニ遇候日本人救助

之為ニ御貸渡之節金子借用之義ニ付東洋銀

行ヨリ之法律書翰

千八百七十二年第十一月二十二日 於倫敦東洋

銀行

茲ニ謹テ一萬五千磅之手形ヲ私入レ置候以書出之旨

御納会下銀子先頃除ニ而救方萬事ニ取計

當方ニ於テ差郎兵

第一　此金子ハ日本政府ノ為ニ御借受可被成貴
君即チ政府之御名代ニ於テノ事
第二　此手形ハ同時ヨリ三ケ月後以後可致払之
外猶其十二ヶ月以内ニハ日本政府御渡シ有之
義ニ付右之御約定但日本政府ヨリ此約証
於テ御払有御望之節ハ格別之事
第三　右之御借入ニ相成候金高ニハ利足相加リ
可申其利足高ハ英国会社所経先割合ヨリ
一分乃至一分五厘上ニ可致且ツ決シテ五分ヨリ以下ニ
不相成事

第四　右之金子ハ御国即チ田中君之手続ヲ以
可御貸渡可仕御同人之御記押ハ此ノ手形ニ
御差継御加有之候事
右之箇條之約定ニ随ヒ此手形ニ御調印之上御返
却有之度候也
政府　ミー、ゼー、エフ、スチュアルト
大久保閣下
田中殿

千八百七十二年第十一月廿六日 倫敦ボツキンハムパルレー
スホテルニ於テ

壹冊五年譜之五冊ニ調印可相求候 右ハ封入ノ上差送
只今慶子ヲ以テ拙者ヘ簡條速ニ一覧致候間此
冊ハ田中調印可相成ニ付拙者ヨリ相達候 吉
田清成儀當府ニ滞留致居候間當地ニテ調印相成候
旧人ヘ調印ニ及ヒ候事ニ付旅行先ニテ差出シ清成方
ハ田中ヘ印残リ差出可申候也

大久保利通

東洋銀行頭取
シーゼーレーユフ、スチユアルト殿

一千八百七十二年十一月廿三日 龍動

東洋銀行会社長

ヤンスン

拙者儀先般貴君并吉田大蔵少輔ヨリ預リ置候證書入
ノ貴銀行ニ於テ右壱万五千磅ノ金高其国中
ノ籍政府之證印残リ有之候所計可相成別紙ヲ以
ノ事一寸申上候以上

大久保大蔵卿殿